

復日記 私の原点、再会

吉永英未

7月。第一週目には全てのテストが終わり、第一弾の学生たちは、両親の待つふるさとに帰っていった。

大学の中に暮らす私たちは、食堂や図書館、大学内を歩いていると、人の流動が伺える。大幅に人が減ったため、食堂では並ばなくてもすぐにご飯が食べられるようになった。

普段は、授業が終わる11時半を時計が回ると、食堂には長い列ができ、自分が並んでいる列で何を食べられるのか分からないまま並び続け、おかずを目の前にしてやっと注文できるという具合である。

「第一弾」というのも、旧正月を過ごす冬休みと違って、夏休みの場合約半分の学生はその前半をインターンシップや課外活動、研究生となると実験や研究で大学に残るため、約半分の学生だけが実家に帰るためである。その他の学生は、夏休みの後半に一、二週間実家に帰り、新学期のはじめにまたもどってくるのである。

第一弾の学生が実家に帰った頃、7月の初め、私の本当の戦いが始まった。今学期一番お世話になり、心を許しあった食堂の馬くんは実家に帰り、上海にもどってくることはないということ、涙のお別れになった。図書館で勉強しながら自然に涙が溢れてくるほど切ないお別れとなったが、そんな中でも私には向き合わなければならないことがあった。それは、半年前に申し込んだELTSの試験である。試験料が1800元と、決して安くはない値段、そして何より、自分で決めた目標を簡単に諦めるわけにはいかなかった。

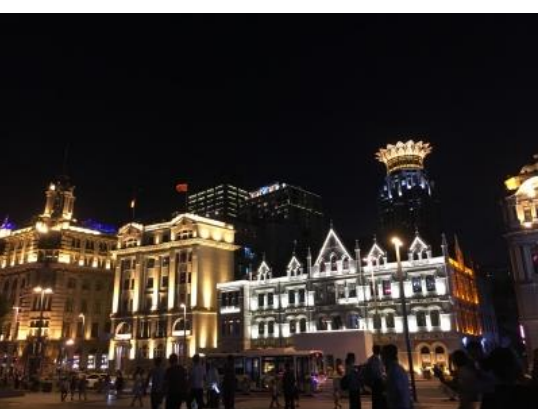
半年前から参考書を買いきり、以前これらのテストを受けたことのある学生から勉強方法を聞いて回った。復日大学の学生は、私の周りで大体3人のうち一人は過去にELTSもしくはTOEFLを受けたことがある。それも高得点を取っているので、様々なアドバイスをもたらすことができた。中国では、本の値段が日本と比べてかなり安い。また、中古のものもあり、その値段の安さに欲しい本はいろいろ全て買ってしまっ。

ELTSとは、全世界で行われているケンブリッジ大学の主催する英語の試験で、大抵の場合イギリスの大学もしくは日本のいくつかの研究生入試の英語科目にも認められている。

試験は、聞き取り、長文読解、作文、会話

(Listening, Reading, Writing, Speaking) NGHLYP、試験は約3時間15分。TOEFLより並の難易度を高く、何万とこの単語を暗記しなければならない。

高校以来まともに英語の試験勉強をしたことがなかった私は、まず「勉強」そのものに慣れるのに時間を要した。とくに



長文読解には苦勞した。文章を一生懸命読んでみると、前の文章の内容を忘れていく。また、問題文の中で出てくる単語がわからず悪戦苦闘するという具合である。

上海の夏は暑かった。少なくとも、鹿児島と比べるとかなり蒸し暑く、外にじっとしているだけで汗がにじみ出た。そんな暑さの中、7月30日の試験に備え、毎日のように図書館開館の時間とともにいつもの席に着いた。

朝6時起床、洗濯物を手洗いし、部屋をモップがけし、そのあと北食堂で朝食を済ませ、8時半の開館とともに理系図書館に入る。夏季休暇中に開放された教室は限られており、大学に残る学生はほとんど、涼しい図書館で自習するため、開館とともに席を取らなければ、9時には学生でいっぱいになってしまう。

朝食の時間になると席を外し、近くの食堂で朝食を済ませたあと自分の部屋に戻り、お昼寝をする。まさに、「中国時間」である。日本から来たばかりのとき、「え、お昼寝!?!?」と最初は信じられなかったが、周りのどんな優秀な友人もお昼寝をするし、午後1時半、2時頃になるとみんな起き出して勉強なり仕事なり行くところを見ると、これは効率の良い方法なのかもしれないと思ひ、私もやってみることにした。

早朝から活動を始めているため、お昼になるとたしかに眠くなる。しかも、昼寝をしたあとは、午後になっても眠気が来るのがなく、夜の睡眠にも影響が出ない。このお昼の1時間こそが、中国の方々の心身の健康の秘訣なのかもしれない。

お昼寝の後、午後はまた図書館に戻り勉強し、午後6時食堂のご飯がなくなる前に食堂で夕食をとる。夜はサークルの図書室に遊びに行き、おしゃべりをしたり、食堂で働くおばさんたちと中国のテレビドラマを見たりして過ごした。一日の中で唯一リラックスできて、楽しい時間だった。

そんな規則正しい生活を送っているうちに、ついに7月30日、IELTS試験の日がやってきた。筆記試験の3日前にはスピーキングのテストがあった。実際にイギリス人の試験官を前に、約15分の会話の試験が始まった。外国の方と話すことは日常的であったため、緊張することはなかったが、自分の言いたい事を長文で、相手に伝わるように話すのは私にとって簡単ではなかった。

筆記試験の会場で、外国人受験者は私ひとりもしくは、いても大変少数だったと思う。ほとんどが、夢を抱えた中国の学生、社会人の人たちだった。

試験時間は約3時間だが、試験会場に拘束される時間も合わせて約4、5時間にも及んだ。試験中、水を飲むとトイレに行きたくなり、トイレに行くと自分の試験時間が削られるため、ほとんど誰も席を立たない。私もそのひとりだった。

試験が終わった時の開放感、何より、8月3日に鹿児島に帰ることができることに心から嬉しく、待ちきれなかった。



8月3日、一年ぶりの帰国に胸を躍らせていた。私の期待をよそに、滑走路が込み合っているため、機内で待機することになった。待機しているうちに今度は雨が降り出し、「悪天候のため、大変申し訳ございませんが、、、」と引き続き待機することになった。そのうち、飛んでいない飛行機の中で機内食も配られた。忍耐強く飛行機の中で待機すること4時間、飛行機はようやく上海を離陸し、一時間半後、鹿児島空港に到着した。

空港に迎えに来てくれた家族の顔を見るたびに、時の流れを感じる。人間は、気づかぬうちに、でも確実に年をとっていく。自宅に帰る前に母方の実家で4日間余暇を過ごし、「にほん」を満喫した。霧島の自然はまるで私に「えみ、おかえり」と言ってくれているようだった。昨日まで中国の土地にいたことがうそのようだった。

一年ぶりに帰ってきた我が家はちっとも変わっていないかった。変わっていたのは、子供の頃賑やかだった通りが静まり返り、いつも優しく声をかけてくれる近所のおばあちゃんの家がいつの間にか留守になり、以前は向こうの空まで見えていたところに新しい店が立ち並んでいることだった。そして、親友との再会。半年も一年会っていなくても、まるで昨日会ったばかりのように、一緒に過ごしていた「あの頃」のように、離れていたその距離や時間を感じさせなかった。

そして、お世話になった先生方との再会。母校である鹿児島国際大学は、私の夢のはじまった場所でもある。たった一日の大学日であったが、スクールバスを降りてからマ号館へ向かう道は、大学で過ごした日々を思い出させてくれた。

たった二週間の帰国であったが、様々な場所で、自分の原点を感じさせてくれた。お盆中、お墓の前で手を合わせるとともに、祖先の方々に感謝の気持ちでいっぱいになった。冬休み東南アジアを旅していた私にとって、一年ぶりの帰国だった。そして、一日一日全てが充実し、愛と反省に溢れていた。

留学生生活最後の一時帰国は14日間、あつという間であったが、一つだけたしかに言えることは、鹿児島は私の原点であり、家族、友人、お世話になった先生方は、愛を持って私を育ててくださったかけがえない存在であるということ、そしてこれからどこへ行っても、どんなに時が経っても、それは変わらないということである。

私のふるまとは、ずっと、私のふるまひ。

上海での再会

9月18日、私が上海にもどっていると、第三弾の学生たちが実家に帰っていったようであった。夏休み最後の二週間を、故郷で過ごすためである。私は、修士論文に取りかかった。指導教員の馮先生はイギリスに出張にいかれたため、とりあえずいまは自分でできる限り進



め、新学期が始まってから再び面談をすることになった。

私の論文の時代背景は、日中国交正常化である。田川誠一という外交官の日記を中心に、外交官の交際、その未来を信じ、いまだ「戦争状態」だった中国に11回訪問し、交渉に当たった外交官について、その歴史認識や政策を中心に論文を書き進めている次第である。

8月末、上海にはたくさん「旧友」と再会することができた。思わぬ再開に、驚きと喜びを隠せない出会いもあった。

上海に戻ってから3日後に、鹿児島国際大学に留学に来ていた賈慶超さんと再会した。賈慶超くんとは、一緒にラーメンを食べたり、作文を書いてはお互いに添削し合ったりするなど、学部時代はとても仲の良い友達だった。

現在吉林で働いている彼が上海に遊びに来るということで、彼に復旦大学を案内したり、午後は一緒に上海を観光した。時間が経っても変わらない友情は、もちろん国籍も問わない。私たちは昨日別れた友達のように、再会を喜び合い、変わらない笑顔で離れていた時を埋めた。

南京大学でお世話になり、現在上海でインターンシップをしていた樊士慶とは、一緒にバンドミントンをしたあと、自転車で外灘(The Bund)までいった。自転車で初めての遠出。予想以上に近く、30分足らずで外灘についた。地下鉄に乗るよりもとても気分が良い。とくに、8月末はあの蒸されるような暑さが溶け、外でそよ風に吹かれているだけで幸せな気分になった。素晴らしい気候である。

三人目は、これまた鹿児島国際大学時代のチューター熊青青さんである。彼女は、学部時代のチューターで、鹿児島に来たばかりの彼女を連れてケーキ屋さんに行ったり、私の家で食事をしたりした。笑顔が素敵な青青さん、そんな彼女となんと上海行きの飛行機を待つ鹿児島空港でばったり会い、一時帰国を終えた私と、これから一時帰国する彼女は、約4年ぶりの再会を果たした。まさに、感無量である。

お互いに「留学中」の私たちは、昔の話、今の話に花が咲き、おしゃべりが途切れることがなかった。そんな彼女がまた鹿児島に帰る際に上海を経由するということで、私たちはまた、上海の中心街で落ち合った。私たちは「あの頃」のように、笑い合い、人生について、語った。



そして、8月31日、この夏の最後、私の親友でもあり、大好きな先輩である王章玉先輩が深圳から上海にもどってきた。というのも、上海へ出張に来たのである。一年以上も会っていないかった私たちは、あの頃と同じメンバーで、あの頃と変わらぬ笑顔でまたここ上海で落ち合った。

どんなに楽しい時を過ごしただろう。「僕が卒業したら、きっと仕事が忙しくて、あまり君たちに連絡できないかもしれない。でも何年後、きっと帰ってきて、近状報告をしに来るからな。」

そういった彼は本当に、働いてからというものめったに連絡をくれることがなかった。

私は彼らが卒業後、一緒にご飯を食べたり、バドミントンをしたり、楽しい時間を共に過ごした仲間がいなくなり、さみしい気持ちでいっぱいだった。しかし親友が、私たちのことを忘れることなどもちろんなかった。

一年後、王章玉先輩は本当に帰ってきて、私たちと再会した。涙が出るほど笑い、話は尽きる事がなかった。一緒にバドミントンの試合に出て、二位を取ったこと。私の試合に応援に来てくれたこと。仲間たちと彼の故郷、西安に行き、命懸けで華山を登ったこと。私のプッシュゼンテーションの発表を手伝ってくれたこと。誕生日、卒業式、中国の様々な祝日を一緒に過ごしたこと。一つひとつの思い出がまるで昨日のことのように蘇ってきた。

友情も思い出も、色褪せることがない。時が経つにつれてそれはもっと味わい深いものとなる。この夏に再会した仲間たちの笑顔をこれからも忘れることがないだろう。またどこかで、再会を誓い合った私たちはきっとまたいつの日か、どこかで、会うことができると信じている。

明日から始まる新学期。復旦大学で過ごす最後の一年が始まる。

後退することがあっても、傷つくことがあってもいい。それらは全て、私の成長の糧となるから。お世話になった全ての人たちに感謝の気持ちを込めて、そしてこれから出会い、お世話になる全ての人達との出会いを祝福し、新学期の始まりをここに祈念したいと思います。

2016年9月1日 吉永英未